

The Victorian Studies Society of Japan Newsletter No.12

2012年度大会開催

2012年11月17日(土)、中央大学駿河台記念館において年次大会が開催されました。以下、当日の特別講演、シンポジウム、自由研究発表の記録を掲載します。報告要旨に、大会での議論を踏まえたコメントを付け加えてもらいました。

【特別講演】

『わが秘密の生涯』(My Secret Life)を読む

大浦康介

目次：

特別講演	
『わが秘密の生涯』 (My Secret Life)を読む	1
大浦康介	
シンポジウム	
「海の歴史とヴィクトリア時代」	
金澤周作	3
坂本優一郎	4
石橋悠人	5
合田昌史	6
研究発表	
大橋千暎	7
唐戸信嘉	8
橋野朋子	9
花角聡美	10
志村真幸	11
坂元正樹	12
2013年度大会シンポジウム趣旨説明	13
研究動向	
真屋和子	14
藤本憲一	16
2012年度総会報告	18
2011年度決算	19
2012年度予算	19
会員の業績2012	20
第13回大会のお知らせと研究発表の募集	24

『わが秘密の生涯』はヴィクトリア時代のジェントルマンが書いた浩瀚な(全11巻・総4200頁)性的自伝である。1890前後の数年をかけて、きわめて限られた部数の私家版として匿名で刊行されたものだ。作中“Walter”の名で呼ばれる著者については、艶本収集家で書誌学者でもあったHenry Spencer Ashbeeではないかという説があるが、定かではない。執筆時期は、ほぼ1850年から1890年にかけて(作者25歳のころから約40年間)、作品内容がカバーしている時期は、およそ1830年から1885年にかけてである。したがってウォルターが描いているイギリス社会は、大まかにいって1880年代までのヴィクトリア時代の社会だといえる。形式としては回想記だが、時間的スパンの短い回顧が延々と連ねられているという点で日記の形式に近い。

このヴィクトリア朝版Vita sexualisは、おもにメイドや娼婦を相手にした性的遍歴の記録である。そこには、およそ「男と女が性器をもってできることのすべて」が綴られている。とくにシャーロット、メアリー、キティ、サラといった作者が一定期間懇ろにした女性たちについては、その生い立ちや親兄弟の職業、生活状態、使用人や娼婦になったいきさつなど、一種



のライフ・ヒストリーまでが語られていて、ときに心打つ物語となっている。本書がヴィクトリア時代の貧困の実態や売春の実情を知るうえで第一級の資料であることも否めない。

ウォルターはこれらの女性のしばしば悲惨な生活をひたすら淡々と綴っている。売春という自分の行為に罪の意識を抱くわけでもなければ、彼女たちの境遇に憐みの感情を抱くわけでもない。

「聞いたまま」、「見たまま」が彼の鉄則であったようだ。思想を述べるわけでもなければ、道徳的なコメントを加えるわけでもない。偽善的な弁解も皆無である。彼に信念といったものがあつたとすれば、それはただ性的快感のたしかさと、それを購うのに必要な金銭の価値に関するものだったように思われる。本書についてはよく率直さ、ストレートさが取りざたされるが、それがもつ強く訴える力は、根本的には、金銭による取引を媒介とした、徹底した性的快楽の追求におけるある種の平等主義（私のいう「ベッドのなかの平等主義」）から来るのではないかと思われる。

一方、『わが秘密の生涯』には、控え目ながら、私が「秘匿と暴露のドラマツルギー」と呼ぶテクスト戦略（あるいは物語戦略）が見られる。そのひとつの現われが、“Introduction” に仕組まれた「これは友人が遺した手記で、自分は編者にすぎない」とするフィクションである。この種の「編者の序文」は、周知のように、18世紀の回想記小説や書簡体小説の冒頭にしばしば見られるものだが（英文学でいえばデフォーの『モル・フランダース』やリチャードソンの『クラリッサ』）、『わが秘密の生涯』の本文はフィクションではなくautobiographyであるから、ここではautobiographyにフィクショナルな序文が付いていることになる。ちなみに、これは「フィクションがautobiographyを真似る」のではなく「autobiographyがフィクションを真似る」というパラドックスの一例だと考えられる。

『わが秘密の生涯』では覗きの体験が再三語られるが、これも「秘匿と暴露のドラマツルギー」の現われと見てよい。そもそも“*My Secret Life*”というタイトルじたいが示唆的である。とはいえこの作品は、全体として見れば、また他の「ポルノ作品」と比べるなら、「秘匿と暴露のドラマツルギー」（およびそれを貫く「猥褻のロジック」）から驚くほど自由である。ウォルターは、“Preface”で、いわば『ファニー・ヒル』の向うを張って、その男性版とでもいえるようなものを書こうと思ったと述べているが（彼は『ファニー・ヒル』を女性が書いたものと思っていたようである）、『わが秘密の生涯』と『ファニー・ヒル』のテキストを比較すればこの点での違いは歴然としている。

それでは『わが秘密の生涯』の真骨頂といったものはどこに見出されるのか。本講演では、最後に、二つの抜粋を引用・分析しつつ、それを、「やる」と「書く」ことが等価であるような（「20回やれば、20回書く」という言い方に象徴される）性に密着した稀有なエクリチュールの創造を見た。

【シンポジウム：海の歴史とヴィクトリア時代（1）】

海の歴史のルネサンス

金澤周作

今回、「海の歴史とヴィクトリア時代」と題したシンポジウムを開催させていただいた。わたしたちの目的は、ヴィクトリア時代理解の深化のために海の視点の導入を提案することであった。むろん、シェイクスピア、デフォー、スウィフト、ワーズワース、バイロン、ディケンズ、ステューヴンスン、コンラッドなどにより、海を重要なモチーフとした英文学が多く産出されたこと、それゆえ英文学研究が海という要素を守備範囲に入れてきたであろうことは承知している。問題は、各種文学・絵画作品にみられる海にまつわる表象群を支えていた「リアリティ」——こう言った方がよければイギリスという時空間において多様な主体が織りなした海の「言説」ないし「プレゼンス」の総体——に、これまでの英文学研究やヴィクトリア時代研究が十分に自覚的であったかということだ。

一般に、ヴィクトリア時代のイメージは、総じて陸地的なものである。イギリスは帝国であるという外向きの性質を想起したところで、そのイメージは、版図・勢力圏を朱色で塗りつぶした帝国マップにあるように、やはり陸地的と言わざるを得まい。

もちろん、海が無視されてきたわけではない。「大英帝国」は「七つの海」を支配した。イギリス海軍は18世紀後半から20世紀の初頭に至るまで圧倒的な優位を保ったし、同じことは同時期のイギリス海運にもあてはまる。したがって、海はイギリスの強さや活力が発揮され、証明される場だったという点について、大方異論はないだろう。例えば、ワイト島にあるヴィクトリア女王と夫君アルバート公一家の居館オズボーン・ハウスのために注文制作されたフレスコ画、William DYCEの*Neptune Resigning to Britannia the Empire of the Sea* (1847)を見てほしい。タイトルの通り、海の神ネプチューンが、堅固な陸地の上に立ちライオンを従えたブリタニアに対して、海の支配権を象徴する冠を譲り渡している。

しかし、海の「リアリティ」はこのような、右肩上がりの強いイギリス像を補強するものでは必ずしもないし、一つの方向性に収れんするような単純なものでもない。近年の歴史学は、人と海との多様な関係のありさまに熱い視線をなげかけ、すでにさまざまな新知見を提出し、次々に新しい問いを発見するようになってきている。「海の歴史のルネサンス」といってよい状況が現出しているのである。このシンポジウムの報告者はみな、それぞれの現場で期せずしてこの潮流の一部をなす研究を行ってきた。そして、この総論で強調し、以下の各報告でも例証されるのは、①海洋の構築性・複数性、②海の支配・海の経験の多様性、そして③陸地と海の時代像（時代区分）の違いである。

それを踏まえ、再びダイスのフレスコ画に戻りたい。ネプチューンは本当にブリタニアに膝を屈したのだろうか。もしかして、主導権は一貫してネプチューンの側にあり、彼の恣意により海の支配権が暫定的にブリタニアの下にやってきただけなのではないか。このネプチューンは、ポルトガルやスペイン、オランダにもかつて冠を渡し、やがて取り上げてきたのではなかったろうか。また、海の支配権はブリタニアに富と栄光だけをもたらしたのだろうか。彼方から到来した冠を担うのは（ブリタニア本人ではなくともそのもとで生きる誰かの）重荷と労苦ではなかったろうか。再びネプチューンが冠を取り上げてやってきたとき、ブリタニアとその民の内心に去来したのは喪失の悲しみだろうか、解放の安堵だろうか。

このシンポジウムでわたしたちが目指したのは、このようにダイスの作品の解釈を「リアリティ」に即して宙吊りにすることであったと言っても過言ではない。それが成功したか否かは参加してくださった方々の判断にゆだねたい。文学と歴史学の実り多い協働のきっかけになればと祈るばかりである。なお、わたしたち報告者を含む研究者グループは、本シンポジウムで主張したような多様な海の歴史を、近世・近代イギリス全体にひろげ、さらにイベリア、フランス、オランダ、中国などと対比させつつ包括的に——ただ「多様」だというのではなく体系的に——叙述する海事史入門の共著を作成しつつある（金澤周作編『イギリス海事史入門—闘争と共生の世界史《仮題》』、昭和堂、近刊。初校済）。いづれそちらもご参照いただけたらさいわいである。



海とともに生きる

坂本優一郎

「海域」とは何か。「海域」とは、「狭義の『海』のみならず、『海』から地理的・経済的・社会的・文化的に直接・間接の影響をうけた空間」と、暫定的ではあるが定義しておこう。では、なぜ「海域」が問題なのか。これまで「海」に関連した経済の営みは、「海運史」・「造船史」・「漁業史」というかたちで叙述されてきた。しかし、これらの研究では、「海」という空間そのものの特質を問う意識は、おしなべて希薄であったといってよい。「海」は与件とされたのだ。この与件を問い直すことにこそ、「陸」を中心とした歴史叙述の限界を明らかにする鍵があるのではないか。「海」がどのように構成されてきたのかを、人びとの関係性から問う必要がある。人びとのつながりは、おそらく狭義の「海」にとどまらないだろう。そこで今回の報告では、「海域」を構成する数多くの要素のなかから「経済」をとりあげ、人びとの関係性がどのように「海域」を構成したのか考えてみた。

報告では、四点のポイントを挙げた。それは、手法、目的、空間、時間である。

第一に「手法」について。捕鯨船「ディスコ・ベイ」号、船主ジョン・ロング、船員エドウィン・フォックスの経験を取りあげた。「捕鯨船」の多様な転用のあり方、船主を取りまく人びとの実像と相互関係、「海域」独特のライフ・サイクルや多国籍性を明らかにすることによって、「産業史」の再生産や羅列でなく、人びとの実態や諸主体の経験の多様性から「海域」空間を描き出してみた。第二に「目的」について。‘Maritime History’が目的化すると、新たな蛸壺を作り出すことに終始する可能性がある。つねに「陸域」との接続を念頭に置かなければならない。報告では、捕鯨船の所有構造を取りあげ、「陸域」からの投資こそが「海域」での経済活動を成立させていたことを描き出した。第三に「空間」について。「〇〇海」は独立して存在しえない。しかし、個々の「海域」の様相は、それぞれ異なる。こうした接続性と固有性については、船舶が沿岸・大西洋・バルト海とい

う性格が異なる海域にそれぞれ適合した用途で転用されたことや、船員がライフ・サイクルにあわせ主体的に航海先を選択していたことに注目して議論した。最後に「時間」について。「海域」を可視化することで、新たな「時代区分」が可能になるのか。報告では、海運のありかたを規定する法体系の整備こそが、自由貿易が成立する前提条件であったことを示唆することで、「レッセ＝フェール」体制への移行という「陸域」での時代区分のありかたと、海域での「時代区分」のありかたの関係を問題提起した。

フロアからは二つの質問をいただいた。ひとつは、「海域」における「階級」の問題である。「陸域」とは対照的であるが、「海域」でまず問題なのは、「階級」ではなく、「能力」であった。一船員から身を起し最後には船長の座についた船員エドウィン・フォックスの事例は、その典型として理解できる。同様のことが、海軍と陸軍のありかたの違いにも適用できるかもしれない。ただし、たとえば東インド商船の船長職につくためには多額の買い取り金が必要であり、財産の多寡が海における社会的な上昇の前提条件となることもあった。「メリトクラシ」を過度に強調しすぎることはない、一定の危険もある。

もうひとつは「インターフェイス」の問題について。実は、この報告で「海域」はかなり閉鎖的な空間としてとらえられている。船員フォックスが船員として人生の第一歩を踏み出した契機が材木商であった父の「海」につてであったことや、フォックスの息子もまた船員になったことなど、「海域」に生きた人間だからこそ「海域」で生きることを選択した、というロジックを見出した。実態として、「海域」がある一定の閉鎖性をもっていたことは確かである。しかし、すべてが「海域」内で完結していたわけではいえない。むしろ逆に「陸域」を前面に出して問題化する必要もあった「陸域」の人びとが、「海域」をどう見たのか。そのチャンネルは何だったのか。課題は山積している。

【シンポジウム：海の歴史とヴィクトリア時代（3）】

海を飼いならす ——ヴィクトリア時代の科学・技術と海——

石橋悠人

本報告では、航海術に関連する諸科学の発展に焦点をあて、科学技術史の観点からマリタイム・ヒストリーを検討する意義を論じた。圧倒的な海軍力と海運力を誇るヴィクトリア朝イギリスでは、造船技術の革新や海図の作成事業、気象・地磁気・潮汐などの航海に影響を及ぼす自然現象の研究が活発に行なわれた。本報告はこのような海の科学・技術研究に見られる次の三つの特徴を指摘し、海洋帝国を支える有用な科学の発達・普及がいかなる体制のなかで追求されていたかを考察した。すなわち、海軍省による科学研究への組織的な取り組み、国家と民間の科学者集団との緊密な連携、グローバルな次元で実践される科学的観察である。

19世紀前半に、海軍における科学研究は大規模な拡充を経験した。航海術や造船技術の近代化にともない、海軍内でも最新の科学・技術研究の成果を有効活用するための部局が続々と新設された。世界各地の海域で海図作成を行なう水路測量局、航海術のための天文研究に従事するグリニッジ天文台やケープ植民地天文台、経度測定に用いられる天文暦『航海年鑑』の出版に専従する部門の設置や省内への編入を通して、海軍はイギリスを代表する科学研究のスポンサーとなった。これらの部門を牽引するエキスパートたちは、ロンドン王立協会や英国科学振興協会などの科学団体でも主要なメンバーとして活躍し、海の科学・技術の改良にむけた科学者集団と国家との協力関係の構築に重要な役割を果たしている。

学術界や技術者集団のなかでも、海の科学・技術を向上させることは主要な課題であり続けた。例えば、英国科学振興協会では、数学・物理学者たちが潮汐・気象・地磁気に関する研究・討論を行なう一方で、エンジニアたちは造船技術や航海機器の製作技法の改良を目指した。本報告では、I. K. ブルネル、J. S. ラッセル、W. ヒューウェル、G. エアリなどを例示し、海軍がエリート科学者や民間で働くトップクラスのエンジニアに頻繁に協力を求めていたことを論じた。海軍は組織的に集めた膨大な量の観測値を科学者

たちに提供し、彼らが目標とする一般法則の抽出に貢献しようとした。ここに両者の利害の明確な一致を看取することができる。

科学者集団と海軍の連携は、世界各地で海の科学に関わる観測活動が行なわれるための前提となった。海軍が地理的な発見を目指す探検航海や水路測量事業のなかで、士官、船医、学者による地磁気・気象・天文・潮汐などの観察を重視したからである。J. F. W. ハーシェルが編んだ*A Manual of Scientific Enquiry* (1849年) は、海軍当局がこのような活動を奨励するために発行した手引きである。同書は自然科学の各学問領域を代表する学者たちが執筆しており、海軍と科学者集団の密接な関係の一端を示している。海軍当局はこのガイドラインに沿って、世界各地に展開する士官や船医たちを科学的実践の担い手として動員したのである。

結論として、ヴィクトリア期における海の科学・技術研究はいわば国家的な課題として、政府、科学界、技術者集団、産業、船乗りたちの活動が連動するかたちで、きわめて大きなスケールで追求・実践・利用されていたことを指摘した。このように大きなプレゼンスを誇る海の科学・技術の発展を考慮に入れることは、ヴィクトリア朝イギリスに対する理解をさらに深めるための重要なステップになると思われる。

本報告に対して寄せられた質問の多くは、海軍や商船の船乗りたちが先端的な知識をどのように利用したかという点に関連している。しかし、この論点は従来の研究の中でそれほど積極的に問われておらず、報告者自身も満足のいく回答を現段階では持ち合わせていない。科学者たちの発明・発見がいかなる経緯を経て実際の航海に導入されたか、また海軍が収集した膨大な量の観測データはどのように役立てられたのか。こうした「使用」の観点から海の科学技術史を考察する作業が、マリタイム・ヒストリーに新たな展望を切り開くための重要な課題になると考える。

イベリア近世海事史からみたMaritime Britain

合田昌史

本報告の役割はマリタイム・ブリテンの起源をエリザベス朝期に求め、大航海時代を先駆けたポルトガル・スペインとの関係のなかにその個性の揺籃を見いだすことにあった。ポイントはふたつある。ひとつはイベリアの、とくにポルトガルの豊かな海事資料を貪欲に吸収しようとしたこと、もうひとつはイベリア二強が表明した「世界分割」の言説に挑戦したことである。

海事資料は未知の海域の海洋地理を含む貴重な記述・絵図手稿群である。その吸収についてはフランシス・ドレーク、ハンフリー・ギルバート、ウォルター・ローリーの事例を取り上げた。ドレークは世界周航（1577-80）のためにポルトガル人航海士ヌーノ・ダ・シルヴァの知識と技能を、そしてポルトガル人地図作成家フェルナン・ヴァス・ドラードの地図を求めた。ギルバートは1578年からの北米遠征計画のためにスペインに仕えていたポルトガル人航海士シマン・フェルナンデスを獲得した。フェルナンデスは1580年のギルバート北米隊のマスターとして、84年ローリーのロアノーク隊のマスター兼首席航海士としても貢献した。ジョン・ディーの北米図(BL Cotton Aug.1.i.1)はフェルナンデスの海図に依拠すると考えられている。ローリーはポルトガル領インドの副王であったジョアン・デ・カストロの水路誌『航海周航記(1541)』の写本を入手し英訳せしめた。

第2のポイント、「世界分割」とは、1494年のトルデシーヤス条約に定められた大西

洋の分界線が地球の反対側に及ぶもので、これを認可するローマ教皇勅書群の国際法的権威によってスペインとポルトガルはあらかじめ非キリスト教世界を二等分割する権限を得た、とする言説である。すでにフランスは「太陽は他者と同様に我にも暖を与え賜う。アダムがいったいどのようにして世界を分割したというのか。その遺言をみてみたいものだ」という有名なフランソワ1世の発言(1541年1月頃)で反分界の立場を鮮明にしているが、イギリスで本格的に反分界論が展開されるのは16世紀末のことである。リチャード・ハクルートは『西方植民論』(1584年)のなかで「いかなる教皇といえども合法的にこのような贈与をなしうる権威はない」と述べて教皇勅書群の権威を否定し、世界分割に正面から切り込んだが、注目に値するのはジョン・ディーのやや斜に構えた議論である。ディーは『英帝国の限界』(1578年)のなかで、「イギリス王室は北緯45度以北の大西洋全域に管轄権を有する。なぜならコロンブスに先んじてイギリス人が北大西洋で航海を行っていたからであり、また教皇アレクサンデルの分界勅書は、金・真珠・宝石・香料に関心を持ち、キンサイと香料諸島を目指すスペインの狙いを念頭に置いて、それら産物と土地が位置するアゾレス諸島の西および南、すなわち北緯45度以南にスペインの権利を限定することに本来の意図があったからである」と述べている。その背景にあるのはイベリア二強に対する畏怖と、いわゆる北西航路および北東航路に対する期待感であろう。

【研究発表（1）】

『アーマデイル』における語りの特異性と

ジェンダー・イデオロギー

大橋千暁

ウィルキー・コリンズ (Wilkie Collins, 1824-89) は1860年代初頭出版した『白衣の女』、『無名』によって煽情小説 (センセーション・ノヴェル) 作家としての知名度を確立した。コリンズはヴィクトリア朝期における女性の主体性の問題を作品の中心に位置づける上で、ヘンリー・ウッド夫人やメアリー・ブラッドドンなど同時代の女性作家の作品の影響を少なからず受けたが、それは特に『無名』においてヒロインがアイデンティティーの捏造と偽装結婚を通して、両親の遺産の奪還を画策する過程に見て取ることができる。アラン・アーマデイルの資産を目当てに、画策を繰り返すアンチ・ヒロインのリディア・グィルトを中心にプロットが進行する『アーマデイル』は『無名』におけるセンセーションリズムを踏襲するが、同時にコリンズは特異な語りの構造を導入することによって19世紀英国社会における女性の抑圧された内面性をそれまでの作品とは異なる独特の手法で描き出していると言える。

『アーマデイル』に登場する女性キャラクターは、リディアだけでなくオルダーショウ夫人、アーマデイル夫人、ミルロイ夫人、ミルロイ嬢など、社会規範から逸脱した女性ばかりであるが、社会階層を横断した父権的イデオロギーの下で彼女達が厳格な社会的倫理規範から逸れてゆく様子を描くことで、この作品は女性一般によって共有された父権的社会の下での抑圧された内面性という主題を中心に置いている。コリンズはリディアの人物造形において、当時の社会犯罪の数々をモデルに採ったが、リディアが幼少期から性的搾取・虐待を受けた経緯を作中にて詳述することで犯罪者の出自よりも心理形成の過程に重点を置き、犯罪と下層階級の環境との関連性を強調する傾向にあったコーンヒル・マガジンの論調と距離を置いた。又、この作品は そのような女性が上・中流階級の家庭を渡り歩く過程をも描いており、それは階級間の流動性を同時に示すものである。

コリンズは作品の後半部において、日記という媒体を通じてリディアによる一人称の語りの支配性を増大

させているが、前々作の『白衣の女』におけるマリアン・ハルコムの日記の場合とは対照的に、コリンズはリディアの声が一定の自律性を確保するべく技巧面において工夫を凝らした。『アーマデイル』には『白衣の女』におけるウォルター・ハートライトのような語り全体を統括するキャラクターは設けられておらず、コリンズはリディアを含め、各語り手に同等の自律性を付与することで、物語を多角的に読者へ提示することに重点を置いている。作品は冒頭からアーマデイル家の物語を通してリディアに対して破壊的なイメージを付与しているが、社会的な犠牲者としての彼女の内面性をも映し出す日記のセクションはその冒頭のイメージを塗り換える機能性を担うものである。

日記はリディアがアーマデイル邸の遺産の奪取を目論んだ計画を記録する媒体として機能するが、同時にそれはミドウィンターと結婚した後の彼女の経済的欲望、そして家庭的な妻として振る舞うことを十分に許さない夫への不満を前景化するようになる。日記を書くことでリディアは「墮ちた女性」としての自身の過去への柵と、理想的な妻としての可能性との狭間で葛藤するが、善悪二元論的な価値体系の下で自身のアイデンティティーの在処を求める彼女の規範意識は当時の既成の倫理規範に則ったものであり、当時のフェミニスト運動とは一線を画すものである。リディアの日記は、家庭空間における女性の居場所を巡る内的軋轢を表象しているが、コリンズは作品の後半部において日記と全知の語りを交互に並べることで、リディアの視点の相対化している。『アーマデイル』は、当時のコリンズの作品の中では最もラディカルな作品と目されたが、逸脱者に対して一定の理解を示す立場を採りつつ、こうして悪女たるヒロインを「墮ちた女性」でありながらヴィクトリア朝的な理想的な女性像を追い求めた人物として示しており、コリンズの保守的なジェンダー観を同時に表した作品であると考えられる。

【研究発表（2）】

聖書史観の解体 ——トマス・ハーディとヴィクトリア朝の文献学——

唐戸信嘉

本発表はトマス・ハーディの生涯、および小説における信仰喪失の問題が、19世紀にかけて聖書史観を解体に導いた大きな要因である聖書文献学とどのように結びつき、また小説上で展開されているか、その間テクスト性を検討した。

18世紀後半にドイツの教会内部から生じた理性主義の風潮は聖書文献学——高等批評とも呼ばれる——を発達させ、合理的精神に基づいた聖典の史実調査を推し進めた。フランスの文献学者エルネスト・ルナンは「近代精神の作り手は文献学者だ」といったが、これはキリスト教の価値の相対化に果たした文献学の役割を鑑みるならば、決して誇張ではない。聖書文献学の戦略は、聖書から、そして人類史から超自然的な要素を排除することにあつた。ダーフィット・シュトラウスのイエス伝はジョージ・エリオットによる英訳が早くも1846年に出ており、その影響は『エッセイズ・アンド・レビューズ』の読書等を通じてハーディにも影響を与えている。『ダーバヴィル家のテス』には、主人公のクレアが福音書における奇跡やキリストの復活を文字通り受け入れることができず、牧師である父親と信仰を巡って議論する場面があり、『日陰者ジュード』では古いキリスト教の価値観の内に生きるジュードを、先進的な聖書解釈を身につけたスウが、その時代遅れの思想を揶揄する情景が見出される。

1890年代に執筆されたこれら作品を眺めるとき、神学の解体をきっかけとする旧秩序から新しい世界観、歴史観への移り変わりは、聖書文献学から発する超自然との決別という旗印の下に達成されたことが窺い知れるのである。ただ、超自然的な旧世界との決別は、人々をキリスト教の軛から解放したに過ぎず、それは同時に新しい歴史観、人生観を探求する旅路の開始をも必然的に意味した。シュトラウス以降の文献学は正しくこの課題を引き受けたのであり、19世紀後半の文献学者による、エルサレムに代わる新たな祖国、新たな文化的規範の探求の主題が、ハーディ作品でも同様に見出されることは、両者が同じ課題を背負っているゆえである。

『テス』はイギリスの農村生活の背後に土俗的かつ

世俗的な異教世界がひかえていることに読者の注意を喚起する。語り手の視線は民族の古層へと溯り、先祖の文化の発見へと至り着く。そこで示唆されるのは、キリスト教が後代になって侵入して来た外的要素であつて、元来の宗教や人生観は異教的であるという事実である。ハーディは19世紀を代表する大陸の文献学者マックス・ミュラーやルナンの思想に親しかったが、彼らの学問的な成果のひとつは、アリア人（インド＝ヨーロッパ語族）とセム語族を明確に区別し、両者が民族的に全く異なる由来を持っていることを明らかにした点にある。彼らはユダヤ文化とヨーロッパ文化の韌帯を切り離し、ヨーロッパ文化の起源として、インドからギリシアに至るアリア民族の文化を過度に称揚してゆくのである。

こうした文献学者の姿勢は、『テス』のクレアが言う「ヨーロッパ文化はキリスト教ではなくギリシア文化を相続すべきだった」という意見、『ジュード』のスウが言う「私たちはユダヤ人の子孫ではない。エルサレムは、アテネやローマ、アレキサンドリアのような第一級の都市ではない」といった考えと明らかに交叉している。大陸の文献学のイギリスにおける相続者のひとり、ハーディの友人であったエドワード・クロッドは、彼はイギリスにおける純歴史的な視野に立ったイエス伝の作者としても記憶されている。クロッドは、ミュラーやルナンの思想を引き継ぎ、超自然的な要素によって地上における生の享受を否定してきたキリスト教を断罪、ギリシア的な人生観に理想を見出してゆくのだが、「ギリシア的な生の喜び」を理想としてほのめかす『ジュード』の主張は、クロッドのイエス伝との関係においても重要な間テクスト性を提示しているのである。

1890年代のハーディのテクストには、近代の文献学が理性主義の精神の下に探求した新しい世界史の姿が息づいている。それはハーディの歴史認識を考える上でも、今後より一層の詳細な研究が要求される重要な文化史的側面であると思われる。

【研究発表（3）】

1850年代における‘sensation’

——*Blackwood's Edinburgh Magazine*の記事を通して——

橋野朋子

‘Modern Novelists – great and small’と題した1855年5月の*Blackwood's Edinburgh Magazine*(以降*Blackwood's*と表記)の記事でMargaret Oliphantは、Wilkie Collinsの*Basil*(1852)に触れて‘The “sensation” which it is the design of Mr Wilkie Collins to raise in our monotonous bosom, is – horror.’と述べている。‘sensation’の言葉に引用符が用いられており、1850年代、‘sensation’の言葉に何らかの社会的意味が付与されていたことが推察される。また、‘Popular Literature – the periodical press’と題した1859年1月の*Blackwood's*の記事で、E.S.Dallasは、‘We should fly thought, and cultivate sensation’という一節を記している。Collinsの*The Woman in White*(1859–60)が雑誌*All the Year Round*に連載されてセンセーション小説の流行をもたらすのはこの記事の半年ほど後のことになるので、それに先駆けてDallasがこのように‘sensation’の必要性を説いているのは興味深い。センセーション小説研究の先駆的論文である‘The Lighter Reading of the Eighteen-Sixties’(1969)においてKatherine Tillotsonは、‘sensation novel’という用語が用いられた最も早い事例が1861年9月の*The Sixpenny Magazine*の記事に見られると述べているが、今回の発表では、その‘sensation novel’という用語が作られる素地として、‘sensation’という言葉が既に1850年代後半にかけて社会的な現象を象徴する用語となっていたことを雑誌*Blackwood's*を例にとりて検証し、センセーション小説の先駆者の存在であるCollinsの初期の代表作*Basil*と1860年代始めのセンセーション小説の流行に火をつけた*The Woman in White*における‘sensation’の性質とその推移を考察した。

*Basil*で注目すべきは、‘sensation’の単語が作品中20回ほど使われていて、しかもその多くが「身体的」な意味合いで用いられている点である。Collinsは当時の生理学的文献が脳の仕組みを「思考」(thought)と「感覚」(sensation)の二つの領域に分けて解説しているように、作品中様々な箇所‘sensation’の言葉を‘thought’と対比的に用いている。「知力」「思考」と区別された‘sensation’は人間の「本能的」「動物的」側面を暗示するものであり、*Basil*の「献辞」における‘I have not hesitated to violate some of the conventionalities of sentimental fiction’という一文からもうかがえるCollinsのそのような挑戦的な‘sensation’の扱いは当時多くの批評家の批判を招いた。しかし、1859年、雑誌*All the Year Round*で連載され社会的センセーションを巻き起こした*The Woman in White*ではその評価は一変し、特にOliphantは*Blackwood's*の‘Sensation Novel’(1862年5月)と題した記事で、‘everything is legitimate, natural, and possible’と、高い評価を示している。*Basil*で身体的な意味合い

のもと主人公のセクシュアリティを彷彿とさせていた‘sensation’は、*The Woman in White*では主として主人公の漠然たる不安を体現する心理的な意味合いで用いられている。

1850年代 *Blackwood's*は、George Eliotの*Adam Bede*(1859)の書評記事(1859年4月)が‘a new sensation’のフレーズで新しい刺激を追い求める社会的傾向を伝えている他、‘Real and Ideal Beauty’(1853年12月)や‘Manchester Exhibition of Art-Treasures’(1857年8月)などの絵画の批評記事が主としてラファエロ前派の‘pictorial sensation’をめぐる議論を伝えており、‘sensation’という言葉が1850年代に社会的用語として浸透していたことがうかがえる。とりわけ1859年のRoyal Academyの展覧作品を論評した‘London Exhibitions – conflict of the school’(1859年8月)の記事は、ラファエロ前派の影響を受けた作品の数々が新奇さゆえに話題を呼ぶイギリス絵画の現況を嘆く一方で、ラファエロ前派的な「どぎつさ」「けばけばしさ」が適度に中和されている作品に評価を与えているが、その評価基準は、Oliphantが*The Woman in White*に関して‘all the exaggerations of excitement are carefully eschewed, and there is almost as little that is objectionable in this highly-wrought sensation-novel, as if it had been a domestic history of the most gentle and unexcited kind’と、‘sensation’の「自然さ」ゆえに高い評価を示した認識に通じるものである。

‘sensation’の扱いが当時の価値観、モラルとの微妙な関係の上に成り立っていたことは、*Basil*と*The Woman in White*の社会的評価の決定的な違いが如実に物語る。1852年の*Basil*出版から1859年の*The Woman in White*連載にかけての期間は、CollinsがCharles Dickens編集の雑誌*Household Words*のスタッフとして執筆していた時期にあたる。*Basil*におけるラディカルで直接的な‘sensation’が、*The Woman in White*において、Oliphantが「すべてが、筋が通り自然で無理がない」と評価するような「節度ある」‘sensation’へと変貌を遂げている背景には、中産階級向けの雑誌の編集責任者としての立場から常日頃Collinsの道徳に対する挑戦的な姿勢を警戒していたDickensの下での経験のほか、*Household Words*の後継雑誌としてエンターテインメント性を重視して世に打って出た*All the Year Round*の目玉連載小説としての性格が大いに関係したと思われる。今回の発表では、*The Woman in White*の大反響及び、その後のセンセーション小説の流行は、*Basil*執筆に際して「しきりに背くことも厭わない」と挑戦的な姿勢を示していたCollinsが、*The Woman in White*において、「新奇さ」への時代の要求を敏感に感じ取りながらも、その一方で時代の限度をも慎重に見極めた結果であったと結論付けた。

【研究発表（４）】

John Ruskinのエコロジー思想 ——『19世紀の嵐雲』を読む——

花角聡美

『19世紀の嵐雲』というのは、ヴィクトリア朝の思想家ジョン・ラスキンが講演で発表したものだが、1884年発表当時から決して高く評価されてきたとは言えない。当時の彼の精神状態などが要因となり、ただの老人の嘆きとまで言われていた。しかしポイントを押さえて再考することで、年月を経た今でも、彼の主張を意義あるものとして捉えることができるのではないだろうか。

タイトルにもあるように、このテキストは「雲」を中心的なテーマとしている。ただしそれは気象現象として空に浮かぶ雲ではなく、時代を捉えるための媒体となっている。空を覆う黒く不快な雲からラスキンが読み解いたものというのは、19世紀の人々の精神の退廃であった。彼が19世紀に生きていたことを考えれば、彼が実際に黒い雲を見ていたことはおそらく間違いないだろう。当時のイギリスでは、石炭を原動力として工業、鉄道、機械が発達し、大量に排出される煙という副産物がもたらされていたためである。なぜこうした状況の要因が人間の精神なのか。それはラスキンが、機械というものは創造性や目的のない労働や怠惰を助長し、その稼働のために大量の石炭を燃焼、それが大気の流れである「嵐雲」をもたらす、というサイクルを導いていたと信じていたためである。

現状を憂い、環境への配慮、モラルの再確認が必要であるというメッセージが込められているのだが、ではなぜ受け入れられることが難しかったのか。その大きな要因は、講演当時(1884年)、ラスキンがすでに精神的に不安定な状況に陥っていたということである。現実と想像の世界の区別がつかなくなり、異常な言動が見られることがあったため、彼を苦しめる雲は、彼自身の心理状態が空の現象として映し出されたものであると考えられた。心理学で言う「投射」である、と捉える研究者もいる。確かに精神状態の影響は無視できないものではあるが、それを理由に軽視するのは安直であるように思われる。

老人の戯言として片づけられない理由の一つに、ラスキンの鋭い観察眼がある。彼は幼い頃から身の

回りの事物を観察し、それを詳細に記録するという習慣を持っていた。もちろん精神を病む以前から積み重ねたものがあり、それが生涯に渡るあらゆる主張を支えている。そして彼の主張の最大の特徴とも言えるのが、独特の修辞法である。ラスキンの思想のベースには聖書があり、この場合、「神聖なる大気を汚す」という冒涇が「嵐雲」という天罰で人間を苦しめる、という構図を用いている。そのため、一見終末論として信仰心に訴えかけるものとなっている。ただし、彼は絶望的になるのではなく、人間は本来「悪」ではないと確信している。それゆえに改善への希望と期待が込められていることを忘れるわけにはいかない。

このテキストは、一部は精神的な異常、一部はラスキン独特の世界観に脚色されているということは否定できない。また、大気の汚染を指摘するものとしては複雑すぎるため、人々の共感を得ることは難しい。しかし、単なる嘆きとして蔑まれてきたにしても、それまで関心が薄かった空の変化、特に人間の活動によってもたらされる変化というものへの注意を喚起したことは間違いない。ここにこの講演の大きな意義があるのではないだろうか。ラスキンの主張に当てはめて考えると、人間の利益と自然界とが歩調を合わせることは決して簡単なことではない。しかしきれいな空気・水・大地というのは、生物が生きていくために欠かせない要素であり、それを担うのが人間の精神だということになる。この講演を行った意義というのは、こうした思想、意識をもたらしたことでないだろうか。人間の利益を追ってきた過去、環境悪化が叫ばれる現実を変えるはできない。しかし今、自分たちがどんな意識を持ち、どう行動するか、それにより未来は変わっていくだろう。ラスキンが蒔いた思想の種をどう育てていくのか、もしくは枯らしてしまうのか、それは後世にまで課された課題といえる。科学的・物質的な指摘はないが、あえて人間の良心に訴え、考えさせるこのテキストには、宗教や時代を超えた訴えを見出すことができるはずである。

【研究発表（5）】

19世紀後半イギリスの大辞書・大事典の世界 ——南方熊楠を切り口として——

志村真幸

19世紀は「辞書の黄金時代」と呼ばれ、各国で大規模な辞書類の編纂が行われた。イギリスの場合には、19世紀後半～20世紀初頭に、『オックスフォード英語大辞典』、『イギリス人名事典』、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』（第9版）などが出た。本報告ではこれらの成立について、①1840年代：情報交換誌の出現、②1870年代：辞書類編纂のスタート、③1910年代：辞書類の完成の3段階を想定・分析した。言語に関する辞書と、事柄に関する事典は分けて扱うのがふつうだが、実際には編纂作業参加者に共通する人材が多いため、私はこれらを同根のものと考え、一括して分析した。なお、上記3種を該当時期の辞書、事典の代表として取り上げ、以下では大事典と表記する。

①は大事典が出現する以前の時代である。1840年の普通郵便制度の整備をきっかけとして、イギリスでは情報交換誌があらわれる。1849年に創刊された『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌が代表であり、1850年代以降には全国各地で類似の雑誌が創刊される。これらの雑誌はほぼすべて読者投稿で誌面が構成されたのが特徴で、誰かが質問を書き送ると、それについて情報を持ち合わせている読者から回答が寄せられ、掲載される仕組みになっていた（例：質問「ブライ提督の家系について教えてほしい」→回答5本「墓碑／生地・家系・子孫／生地／墓」）。質問内容は言語、人物、地名、フォークロア、文学、歴史など多岐にわたり、およそ半数には数週間以内に回答が出た。これらの雑誌は辞書がわりに使われていたと言えるのである。誌上で質疑応答を行った人物については、オビチュアリなどの分析から、大学教員、図書館員、法律関係者、下級官吏……であったことがわかっており、アマチュア～プロの知識人層と位置づけられる。誌上に無数の知識人がいたことで、あらゆる分野の難解な質問に対応可能だったのである。情報源については書物からの引用を原則とし、フォークロアの場合などには自身の体験も記された。なお、南

方熊楠も在英時代に『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌に投稿を開始し、日本帰国後も質疑に参加し続け、約400本を発信している。

②では、『OED』を中心に取り上げた。『OED』はマレーが編集長となった1879年に実質的な編纂が始まったが、その際、マレーは『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌上で情報収集を行っている。同年10月25日号でAb-で始まる80単語ほどを示し、古い用例を寄せてくれるよう頼んでいるのである。その後も頻繁に質問を出し、多数の用例が『OED』に収録された。また、『OED』では、ヴォランティア・リーダーと呼ばれる人々が英単語の古い用例を探したことが知られているが、そのなかには『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌の常連投稿者数十名が確認される。『イギリス人名事典』の場合にも、編纂開始時に編集長スティーヴンが誌上で協力を呼びかけ、各項目の執筆者にも多くの同誌投稿者が見られる。『エンサイクロペディア・ブリタニカ』（第9版）にも多数が執筆している。すなわち、これらの大事典は情報交換誌に集っていた知識人たちを動員し、彼らの持つ情報を吸い上げて一ヶ所にまとめることでつくられたのであった。

③の時期になり、大事典が整備されると、情報交換誌は一気に衰退する。ほとんどは廃刊となり、生き残った『ノーツ・アンド・クエリーズ』本誌においても、よりマイナーな事柄についての質問が増える。

全体をまとめれば、19世紀半ばのイギリスには情報交換誌というものが存在し、何か必要な情報や知識がある場合には、そこへ質問を寄せれば回答を得ることができた。やがて情報交換誌で活躍していた知識人が『OED』等の編纂作業に参加し、彼ら彼女らの知識を集めることで大事典が成立する。以後は大事典を引けばよくなり、情報交換誌は衰退した。

本報告では以上によって、大事典誕生の過程と背景を明らかにし、さらにこの時期に情報や知識の入手法が変化したことを示した。

【研究発表(6)】

自転車向けロードブックと自転車旅行記の出現と発展 —オーディナリ自転車の時代における自転車旅行の発達—

坂元正樹

自転車は1890年代半ば以降において、現代のものに近い形態の乗り物として広く浸透していった。自転車に乗ることは、当初は高度な身体能力を必要としたが、しだいに誰にでも楽しめる娯楽へと変化していく。こうした変化は、前輪の大きなオーディナリ自転車(及び三輪自転車)が自転車の主流であった1880年代において既に進行していた。自転車の普及と一般化という現象を説明するためには、これまでひろく研究がなされてきた1890年代以降についてのみならず、それに先立つ1880年代における変化が詳細に検討されなければならない。

本発表では、まず1880年代前後における自転車の車体と自転車文化の変遷について概観し、次に自転車文化の進展に大きな役割を果たしたにもかかわらず研究が進んでいない、自転車用ロードブックと自転車旅行記の出現と発展について詳述した。そして、それらが果たした役割について検討を加えた。

1885年に登場したローバー型セーフティ自転車と1888年に発明され1892,3年頃に一般化した空気入りタイヤは、自転車の形態を大きく変化させた。自転車は以前のオーディナリ自転車と比較して、より安全で乗りやすく快適な乗り物となったが、安全性と乗車快適性の向上は、オーディナリ自転車の時代においても、達成が進んだ改良であった。1870年代から1890年代にかけての自転車の間断ない改良と変化は、より幅広い層への購買意欲を喚起すると同時に、買換え買増し需要をも喚起し、自転車工業の連続的な発展をもたらした。

自転車の普及が進むとともに、自転車趣味の中心がレースへの参加からサイクリングへと推移していき、サイクリングにおいても冒険的旅行から安全性計画性の高い旅行へと、その性質が変化していく。同時に、自転車関連出版物とりわけ自転車向けロードブックと自転車旅行記が多く出版されていくことによって、自転車による旅行がより多くの人々によって容易に楽しめる

娯楽へと発展していった。

馬車旅行用そして鉄道旅行用のロードブック及びガイドブックは、18世紀後半以降各種出版され版を重ねていたが、それらは主として携帯性や道路情報の詳細さといった点で自転車旅行に利用するには不向きであったため、1880年代にはさまざまな形の自転車旅行用ロードブックが出版されていく。自転車旅行者の増加がそうしたロードブックの充実をもたらし、利便性が拡大したことにより、さらなる自転車旅行者の増加が促された。

自転車旅行記の出版が単著として盛んになってくるのは1887年頃以降のことであるが、1880年代初頭から自転車旅行記は自転車専門雑誌の主要コンテンツの一つであり続けた。当初は乗車体験記的でガイドブック的な性質も兼ねた実用性の高いものであったが、しだいに優れた挿絵やストーリー性を伴った、読み物としての魅力が高いものが主流となっていく。そして、既に多くの読者を獲得していた旅行記文学の新たな形態として、一般の雑誌にも掲載され、自転車の普及に大きく貢献していくこととなった。

発表後の質疑応答では、自転車の価格、自転車愛好家の性別、階層、年齢などについて質問を頂き、もっぱら都市部の上流中産階級の若い男性による娯楽であったものが、しだいに幅広い層へと普及していったことを補わせて頂いた。また、自転車旅行に先立って一般化が進んだ鉄道旅行における認識の変容との関連性や、ポピュラーツーリズムとの関係性について示唆を頂いた。懇親会の場では、本発表では言及できなかった小説における自転車というテーマについて、貴重な指摘と意見を頂いた。本発表の末尾で提示した、旅行記文学における一ジャンルとしての自転車旅行記文学の位置づけという問題とともに、今後の課題とさせて頂きたい。

2013年度大会 シンポジウム趣旨説明

ヴィクトリア朝とヴォランタリズム

2013年度大会（2013年11月9日（土）、甲南大学で開催予定）のシンポジウムでは、「ヴィクトリア朝とヴォランタリズム」をテーマとします。

ヴィクトリア朝社会を構築する起動力としてのヴォランタリズムに注目し、その歴史的ダイナミズムを検討します。自由主義の中で「自発的に」社会を構築しようとする力と、そこに埋め込まれた価値観がもつ両義性が明らかになります。「ヴォランタリな」社会としてのヴィクトリア朝が我々に語りかけるものとはなにか、みなさんと一緒に考えてみたいと思っています。

【趣旨説明】

「ヴォランタリズム (voluntarism)」は、近代イギリス社会を特徴づける重要な言葉のひとつである。誰かに強制されることなく、自発的意思に基づいて行動し、他者との連帯の中で、良き社会を構築することは、近代的な市民の理想とされた。この規範が世間に充溢し、ヴィクトリア朝の社会に独特の質を刻印することとなった。

ヴォランタリ・ホスピタル、ヴォランタリ・スクール、チャリティ、人々の生存と生活の豊かさを担保する社会的装置には、この理念が埋め込まれていた。また、ナショナル・トラストやイングリッシュ・ヘリテイジなどの自然を維持し、歴史的遺産を保存する運動も、ヴォランタリーな力によって支えられてきた。さらに、このような組織の形 (voluntary association) をとらなくても、世の中をよくするために自発的に行動する良識ある市民の遍在が、イギリス社会の誇りとされた。「自由」や「自立」という至上の価値観は、このような共同の自発的行動に支えられることで、現実的な力となった。その意味で、「ヴォランタリなもの (the voluntary)」は、近代イギリスの「社会的なもの (the social)」を体現する、重要な価値観であったのだ。

他方、国家の側から見てみると、「小さな国家」が成り立ったのは、国家機能の多くを、ヴォランタリズムが実質的に担ったからである。病院、学校、救貧、秩序維持など、社会の諸側面は国民のヴォランタリズムによって支えられていた。そのため、国家はできるだけ前面にでず、自発的な行為をなす者とその組織が十分に力を発揮するための仕組みづくりに腐心した。その意味で、この社会的な理念は、「公的なもの (the public)」としても機能した。ヴォランタリズムは、プライベートな領域における行為を出発点としつつも、社会的な役割を担いながら、公的な制度の中にビルドインされていた。社会的なものとの公的なものは重なり合っていたのだ。

本シンポジウムでは、まず、このヴォランタリズムが、ヴィクトリア朝社会においていかに機能したのか、またその社会的・歴史的源泉はどこに求められるのかを明らかにしたい。次いで、同時代の人々は、いかなる心性のもとにヴォランタリーな行為を行っていたのか、ジェンダー視点も取り入れながら検討したい。最後に、ヴォランタリーな力をもつ「専制」に対する同時代人の「恐れ」を考えてみたい。ヴォランタリーなものは、市民社会を構築する「望ましき」価値規範・行動様式として、とかく肯定的な評価を受けるきらいがあるが、負の側面にも光を当てるべきである。19世紀のイギリス社会では、ヴォランタリズムに対する賞賛と同じくらい、その「専制」への恐怖が存在していたのである。ヴォランタリズムは、この両義性抜きには語れない。

このような歴史的検討は、現代社会の一大争点たる「ヴォランタリズム」を、より長期的な視点にたって再検討するための重要な契機となるであろう。

報告者とタイトル（いずれも仮題）は以下のとおりである。

コーディネータ・司会 高田実（下関市立大学）

問題提起「ヴォランタリーな社会としてのヴィクトリア朝—イギリス的自由の歴史的展開」
パネリスト

光永雅明（神戸市外国語大学）「自由主義とヴォランタリズム」

林田敏子（摂南大学）「社会秩序とヴォランタリズム」

大石和欣（東京大学）「ヴォランタリズムの心性とジェンダー」

【研究動向】

ブルーストのラスキン熱 ——ターナー、エルスチールのモデル——

真屋和子

今年マルセル・ブルースト(1871-1922)の長編小説『失われた時を求めて』の刊行開始から百年という節目の年にあたる。この小説が、スコット・モンクリーフによって英訳されたとき、E. M. フォスターは、原文の持ち味を尊重した正確な翻訳に賛辞をおくりつつも、変わらない難しさに少々がっかりしている。

「初めはきわめて単純な文章がうねるようにひろがっていき、生け垣のような文章が割りこんでくるかと思えば比較という花が咲き、野原三つをへだてた向こうに傷ついた猟鳥さながら本動詞がひそんでいるという具合だから、やっとその獲物を拾いあげてみても、これだけ歩きまわり、これだけたくさん銃と猟犬を使うほどのことがあったのかと首をかしげて、しかも半ページばかり前にきれいに収まっている主語との関係を見れば、けっきょく直接目的格だったことが分かるのである。」(『アベンジャー・ハーヴェストI』小野寺健他訳、みすず書房、1995年)

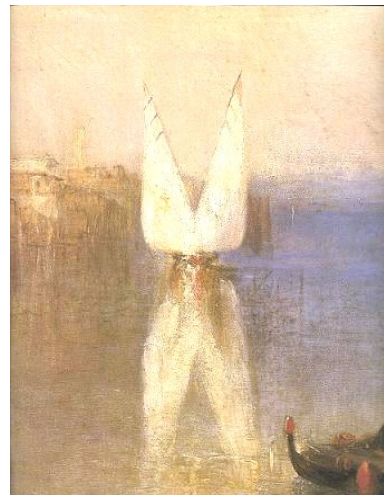
これは見事なブルーストの文体模作でもある。そしてラスキンの文章をも思わせないだろうか。比喩表現に富み、挿入句や節が連なる長文は、ドイツの批評家クルティウスがブルーストを評しているところの「新しい調和をもつ総合文^{ペリオード}」である。「文体はテクニックではなくビジョンの問題だ」とブルースト自身が述べているように、多面的、重層的な、彼のものの見方を反映している。ブルーストにとって、また自伝的色合いの濃い小説の話者にとって、何をどのように見るのか、どのような方法でそれを表現するのかが重要な問題であり、作品全体をとおしての主題もなっている。

ブルーストのラスキンへの傾倒は、1899年、それまで四年にわたって書いてきた『ジャン・サントウイユ』を放棄したところから始まる。断片の寄せ集めでまとまりがなく、一冊の本となり得るような思想もなく、自分には作家としての才能が欠けていると感じて創作は完全に行き詰っていた。苦い挫折と試行錯誤——偉大な思想がなくてもいい、身近にある小さなものにまなざしを向け、見たもの感じたものを、自らの内奥に降りていって照らし出

し、それを「翻訳」して文体のなかに定着させることこそが作家の仕事だ。大切なものは自分のなかにある。ブルーストはこう考えるようになってはじめて、文学創作の意義を見出し、確信をもって小説を書くことができた。このような考えに導いた人こそ、ラスキンなのである。彼の書物との出会いがなければ『失われた時を求めて』の誕生を見ることはなく、ブルーストの「過ぎにしこども」は見出されないまま終わったことだろう。

自らも恋愛心理の過程にたとえるラスキンへの傾倒は「結晶作用」を伴って始まった。決定的な出会いは、美術批評家ロベール・ド・ラ・シズランヌの『ラスキンと美の宗教』(1897)である。この書物に引用された数多くのラスキンの文章にブルーストはすっかり魅了された。1899年エヴィアンに滞在していた彼は、母親宛ての書簡で、「この本を送ってほしい」と二度も依頼している。「ラスキンの眼で」自然を眺めるためであった。

1900年1月、ラスキンの訃報に接して、彼のラスキン熱は高まり、追悼文を書くかわら「ラスキン巡礼」の旅にでる。ちょうどラスキンがターナーの足跡をたどって旅をしたように。さらに彼を『アミアンの聖書』と『胡麻と百合』の翻訳へと向わせる。この仕事にとりかかったとき、フランス語訳は、1899年に出版された『野生のオリーブの冠』と『建築の七燈』の二冊だけだった。



ターナー 《カンポ・サント、ヴェネツィア》部分 1842年

しばしば話題にされる彼の英語力については、母親や友人の協力が不可欠だったかもしれない。しかし周囲から過小評価されていたことも確かで、それだけに友人ジョルジュ・ド・ロリスの証言は興味深い。彼によると、イギリスのレストランでの注文はあやしいとしても、「ラスキンの英語なら微妙なニュアンスまで理解できた」という。翻訳に付けた序文や膨大な量の訳者の注は、博識とラスキン理解の深さを示して余りある。ラスキンを訳すには、「喚起力」と「ペン先に魔力」が必要であるとブルーストはいうが、彼にはそれらが備わっていたということであろうか。

翻訳の仕事をしながら、ラスキンのほとんどすべての著作を読み、彼の美学や思想を消化、吸収して、自家薬籠中のものとした。それがもっとも昇華されて小説にあらわれている場面は、架空の画家エルスチールの描いた《カルクチュイ港》であろう。筆者は拙論「ブルーストとターナー」(1993)を中核にすえた本『ブルースト的絵画空間—ラスキンの美学の向こうに—』(水声社、2011年)のなかで、この絵がターナーのさまざまな絵から着想を得ていること、エルスチールの主たるモデルがターナーであることを、ラスキンの著作や、ブルーストの草稿、書簡などを手がかりとして、多面的、実証的に証明した。しかし従来、エルスチールはモネほかフランス印象主義の画家をモデルにしているとされ、《カルクチュイ港》も彼らの絵の混合であると考えられてきた。事実、草稿のある段階まではそうであった。ブルーストはおそらく、エルスチールを創り出す過程で不協和音に気づいたのだろう。第一次世界大戦中に、推敲が重ねられ、エルスチールの芸術観を纏う衣として、ターナーを思わせる数々の絵にかえられた。一方で、「ターナー」の名は草稿段階で削除されていく。

この場面が重要なのは、ブルーストの美学や芸術観の表明の場となっていること、また筋の観点からは、文学を志す話者に啓示をあたえ、文学創造へと導く役割をこの絵が担っていることである。話者は絵を目にして、物と物の間に境界線がなく、陸が海となり、海が陸となる「変身」をそこに読みとる。それは文学の領域では、「メタモルフォーゼ 隠喩」と呼ばれているものだと直感する。そして、最終巻『見出された時』において、「メタフォー 隠喩こそが永遠である」と確信する大団円へと大きな虹の橋が架けられることになる。何を書くべきか、小説の礎をどこに置く

べきか、この問いをめぐる長い探求のすえに、文学の意義と方法を見出し、文学創作にとりかかろうとするところで小説は終る。

「知っていることではなく見たままを描く」ターナーの、反知性主義の芸術観を示す逸話はラスキンによって伝えられた。感銘を受けたブルーストは小説のなかで、同じ言葉を使って、それをエルスチールの態度としたのである。ターナーの絵や自然を説明するのに、ラスキンは隠喩を駆使しているが、まさにそうした彼の文体からブルーストは多大な影響を受けた。したがって、ブルーストがペンを用いて生み出したエルスチールの《カルクチュイ港》には、視覚芸術としてのターナーと、文学におけるラスキンがすっかり混ぜ合わされ、塗り込められた絵となって透かし見える。

ブルーストの翻訳の仕事は、ラスキンの感受性や思想に迫りながら、ラスキンという鏡に自らを映し出し意識化する作業でもあった。確かに、『アミアンの聖書』の序文では偶像崇拜をめぐって批判をしているし、種々の矛盾にも気づいていた。これをもってブルーストは「ラスキンと決別」したと記す伝記作家が多いのは残念なことである。親和性に支えられたラスキン熱のゆくえはそうではない。彼から得た滋養の豊かさからすれば、こうした批判は幼児期の成長に必要なちょっとした反抗のようなもの、でなければ、「深い自我」le moi profondの探求における通過儀礼のようなものだと思う。しまいには彼を寛容の心で包み、すべてをひっくろめて敬愛していたのだから。——「ラスキンの著作は、ときにばかばかしく、偏執的であるさく、間違っていて、滑稽かもしれない、しかし、それでも彼は、つねに尊敬に値するし、つねに偉大なのだ。」



ターナー 《プリマス》 1825年

【研究動向】

MUSMEEからGYARUへ

——「逆輸入」ジャポニズムの系譜——

藤本憲一

1 「ポケベル少女」と“Samurai Girl”

当方の専門は、ケータイなどのメディアやガジェットを中心とした大衆文化現象と、その哲学的・美学的解明である。去る第9回大会シンポジウム「サブカルチャーとプリティッシュ・アイデンティティ」では、日英のサブカルチャーを比較した(会報no.9,2010)。

最近では、コンビニ商品、嗜好品や睡眠グッズ(眠り小物)など、全世界的な文化現象を考現学的にフィールドワークしつつ、その哲学的・美学的意味を積極的に見出している。最初の単著は、『ポケベル少女革命——メディア・フォークロア序説』(エトレ, 1997)という、ハイテク通信機器と伝統的な少女民俗文化との接点を探るものだった。それまで男性ビジネスマンの手にあったハイテク機器が、十代の少女たちの無意識的なフェミニズムに基づく集団的創造性によって、換骨奪胎的に社交ツールとしてカスタマイズされた点を、「科学革命」として捉えたものだ。

この視点を引き継いで、研究仲間たちと“Personal, Portable, Pedestrian: *Mobile Phones In Japanese Life*”(MIT,2005)という共著を出し、1章をものした(The Third -Stage Paradigm: *Territory Machines from the Girls' Pager Revolution to Mobile Esthetics*)。この論考に対して、予想外に海外からの反応が多くあった。当方が提示した「ハイテク日本娘」像は、海外の方が受けが良かった。

「ハイテクと少女文化」との結びつきについて、日本の学界では「日本特異論、テクノ・オリエンタリズム」と批判する論調が多かったのに対して、海外からは「日本の興味深い文化現象の解説」と見て、肯定評価する声が多かったのだ。

「ハイテク日本娘」像に対する海外の注目は、活字には限らない。たとえば写真家・モデル・歌手のJulie Watai(ジュリ・ワタイ)女史の、2冊の写真集“Samurai Girl”(Drago Arts & Communication,2006)、『はーどうえあがーるず』(コノハナブックス, 2010)の全世界的なヒットがあり、当方の提示した「ハイテク日本娘」像と共通点が多いように思われる(女史とお目にかかったときにも、多くの意見の一致を見た)。

この写真集では、ファミコン、電子パーツ、LANケーブル、マイコン基板、シンセサイザーといった情報機器と、その傍らにたたずむ少女を組み合わせたグラビアで、新しい境地を開いている。

2 「エロティック・ジャポン」と「クール・ジャパン」

こうした「ハイテク娘ジャポニズム」と微妙に角度を異にするのが、フランス人ジャーナリスト、Agnès Giard(アニエス・ジアー

ル)女史が綴る、エロティックな日本イメージだ。

主著『エロティック・ジャポン』(にむら じゅんこ訳、河出書房新社2010、原著“L’Imaginaire Erotique au Japon” Albin Michel 2006)では、日本の古今の事物を、性的なアイコンとして読み解いていく。このためキワモノ本と誤解されがちだが、ジール女史は日本の伝統文化やテクノロジー全般に造詣が深い。昨年、来日した女史は、当方の「ポケベル少女革命」図式をはじめとする「ハイテク娘ジャポニズム」像に、強い共感を示した。

この「エロティック・イメージ」と、「ハイテク・イメージ」という、一見相互に矛盾しそうな「日本娘」イメージに、共通の文化遺伝子は見いだせるか？

さらに、「ハイテク」と「エロス」という極端な「聖域」よりもっと広く、より一般的な文化的バックグラウンドとしては、「KAWAII」ブームを中心とした「クール・ジャパン」の潮流がある。原宿系ファッションに対する、「KAWAII娘ジャポニズム」の全世界的流行である。こちらのビジュアル・アイコンは、2013年から全世界ライブツアーを展開中の、きやりーばみゅばみゅだろう。アニメやポップスにちなんだコスプレやカラオケといった付帯的流行を含め、ひらひらフリフリしたファッションは、世界中の少女たちを虜にしている。日本の「かわいい」文化は、世界のサブカルチャーに対して「美しい」「きれい」「新しい」よりも強いメッセージを発信している。

たとえば、ヴィクトリア朝の身分違いのロマンスを描くマンガ『エマ』は、日英のメイド服の「異化と同化」、「タイムワープと同期」の二重(両義的)話法を織り込んで、若者たちの共感を得ている。メイド服は、「身分の低い使用人のお仕着せ」という英国の歴史文脈と接続しつつ切断され、「KAWAIIコスプレ」として日本で再構築されて、全世界へ再発信されているのである。

「本家」イギリスの若者が、メイド服を「逆輸入」する現象さえ起きている。先の会報でも紹介した、イギリスのマン島に住む少女 Beckii Cruel(ベッキー・クルエル)が、日本の「KAWAII」ファッションに憧れ、J-POPとダンスをカバーし、YouTubeネットアイドルとして有名になり、来日。CD・DVDデビューした現象も、そうした「逆輸入」事例にあてはまる。彼女はメイド服を可愛く着こなしているが、そこに英国の伝統的文脈は消失している。美学的地理上の21世紀のマン島は、イメージの遠近法において、ヴィクトリア朝ロンドンからほど遠く、今や日本の原宿や秋葉原のメイド・カフェと地続きになっている。

3 すでに英語化した“GYARU”

「娘ジャポニズム」の英米における浸透ぶりがわかる現象としては、“KAWAII”だけでなく、“GYARU”までが、英語として受容されつつある現象がある。OEDにはまだ収録されていない(“GAL”は北米俗語として収録済)が、wikipedia英語版レベルでは定着している(2013. 4.30現在)。

ただし、「GYARUはGALの音訳」「この用語はより若い集団に当てはまるよう、しだいに变化した、仕事や結婚に対して無関心に見えることから、子供っぽいイメージを獲得した。今ではkogaryuと同義語として使用される」と冷淡な英語版wikipediaに対し、日本語版では「ローマ字表記にあたる gyaru が英語に借用されている。近年、ギャル文化は新たな輸出産業として日本政府も注目」と高らかに謳い上げる。いずれにせよOEDに載る日も近そうだ。

もともと日本発「ギャル」ファッションとは、「ヤンキー」同様、金髪碧眼や縮毛黒肌の欧米女子像への憧憬を具現化したものであったから、これもイメージ逆輸入の好事例である。

さらにwikipedia英語版には、“Gyaru-kei”(ギャル系)“Hime gyaru”(姫ギャル)“Ganguro”(ガングロ)“Gyaru mama”(ギャルママ)“Gyaru-moji”(ギャル文字)など、単なる表層的な「逆輸入」を超えて、複合的な「ギャル文化」総体の受容(ことによると現地化・土着化)さえ見られる。

4 ヴィクトリア朝の“MUSMEE”ジャポニスム

では、「娘ジャポニスム」の受容(あるいは「逆輸入」)の系譜は、歴史的に見て、いつ頃からあるか?

当方、ジャック・ロンドン(下層社会における闘牛・闘犬文化!)とアラン・シリトー(労働階級青年の鬱屈!)くらいしか読書経験のない、英米文学の門外漢にすぎない。何か探索の手がかりはないか。。。と夢想していると、たまたま手にした論文に、強く触発された。川本皓嗣「ムスメに魅せられた人々——英詩のジャポニスム」(川本皓嗣・松村昌家編『ヴィクトリア朝英国と東アジア』思文閣出版,2006)である。

同論文では、アール・マイナー『英米文学における日本の伝統』(1958)を手がかりに、当時の旅行記や小説などで、「日本女性のすばらしさ——マナーの上品さ、しとやかさ、洗練された趣味、技芸への熟達ぶり」と、その反面、「性的にふしだら」という両面をもっていと指摘。いわば、「淫らな淑女」として「娘ジャポニズム」が喧伝された点に着目する。ちなみに、MUSMEEという語の大流行を西欧にもたらしたのは、ピエール・ロチ『お菊さん』であったとか。

なかでも、ヴィクトリア朝の真只中を生き延びた詩人、サー・エドウィン・アーノルド(1832-1904)は、繰り返し“MUSMEE”をテーマにした、詩を書いている。「褐色の肌、細い眼、黒い髪、屈託のなさ、小ささ」といった日本娘のステレオタイプである。同論文は、W.E.ヘンリー(1849-1903)、マーガレット・ヴェリー(1843-87)、R.キプリング

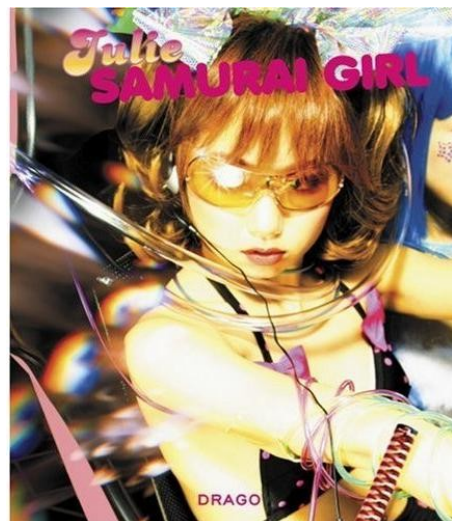
(1865-1936)らの英詩に見られるジャポニズムも取り上げる。

実は、「娘ジャポニズム」をめぐる文学＝「ハイ(メイン)カルチャー」と大衆文化＝「サブカルチャー」とは、洋の東西古今を問わず、常時、緊密にクロスオーバーしてきたのではないか。だとすると、こうした“MUSMEE”⇔“GYARU”が多重的に絡まるイメージ・コンプレックスの一端を、文化的に解きほぐすことはできないだろうか。

たとえば、「ピュア」対「エロティック」、「ストリート」対「インドア」、「おしゃれ」対「おたく(ハイテク)」、「不器用」対「テクニシャン」といった二項対立を組み合わせた多頭的、ヤマタノオロチ的な「ギャル」イメージ(意味連関)が、19世紀の「ムスメ」にまで遡及できないか、ぜひとも検証してみたい。

具体的には、共同研究「ヴィクトリア朝幻想の形成と解体」(基盤研究B・24320514、研究代表・井野瀬久美恵)において、まず3年間にわたって、存分に格闘してみたいと考えている。

■Julie Watai “Samurai Girl” (Drago Arts & Communication,2006) 表紙



■アニエス・ジヤール著『エロティック・ジャポニ』(にむらじゅんこ訳、河出書房新社2010)表紙



2012年度総会報告

2012年度の総会が、大会当日に開催されました。当日の議決事項について簡単にご報告いたします。

日時:2012年11月17日(土) 13時～13時35分

場所:中央大学駿河台記念館2階

I 報告事項

1. 2012年度活動報告について

運営委員会(1回目[8月]、2回目[1月開催予定])

理事会(11月、大会の前日)

編集委員会(3回[2月に1回、7月に2回])の開催

メーリングリストの立ち上げ(1月)

会員名簿(ウェブ公開用)作成のためのアンケートの実施(2月～3月)

シンポジウムの企画募集

2. 学会誌について

第10号(特別寄稿1篇、研究ノート2篇、書評9篇、トピックス3篇、日本ヴィクトリア朝文化研究学会優秀論文賞の受賞なし)11月に発行。

3. ニュースレターについて

第11号(会長あいさつ、2011年度大会報告、第12回シンポジウム企画、2011年度総会報告、会員の業績)5月に発行。

4. その他

特になし。

II 審議事項

1. 2011年度決算について

報告の通り了承。

2. 2012年度予算案について

予算案を了承。

3. 2013年度大会について

甲南大学で2013年11月9日(土)に開催予定。

4. その他:

(1)シンポジウムや特別講演を行う、国内の非会員に交通費(領収書等の提出により実費)、宿泊費(1万円)、謝金(1万円)を支払うことを決定。なお、謝金等の金額は今後さらに検討していく予定。

(2)来年度からウェブ上で理事会・大会・懇親会の案内と出欠報告を行うことを実施することが了承された。

(3)東日本大震災に対する本学会の対応として、東日本大震災に関わる会員の活動等の情報収集などを行うことを検討していく予定。



2011年度会計決算報告書

(2011.4.1～2012.3.31)

《収入の部》

単位:円

項目	金額	備考
前年度繰越金	4,756,935	
利子	349	
出展料	35,000	7社
学会費	1,953,000	
大会補助金(甲南大学)	83,625	
合計	6,828,909	

《支出の部》

項目	金額	備考
通信費	128,060	
大会経費	217,859	プログラム・ポスター製作・郵送費、アルバイト料、茶菓代など
N. L.作成費	45,000	
学会誌作成・郵送費	596,715	
名簿作成費	138,000	
学会誌用図書費	41,527	
振込手数料	32,840	
消耗品費	147,186	
役員会費	626	理事会、運営委員会、編集委員会
役員交通費	166,700	
その他	29,339	105(コピー代)+29,234(懇親会補助費)
合計	1,543,852	1,514,618+29,234(懇親会補助費)
次年度繰越金	5,285,057	

以上のとおりご報告致します。

2012年5月21日 会計 大嶋 浩

2012年6月13日 会計監査 佐々木 徹

2012年度会計予算案

(2012.4.1～2013.3.31)

《収入の部》

単位:円

項目	金額	備考
前年度繰越金	5,285,057	
会費	2,022,000	一般会員322名、学生会員30名(2012年3月31日現在)
出展料	25,000	5社
合計	7,332,057	

《支出の部》

単位:円

項目	金額	備考
通信費	130,000	
大会経費	580,000	会場費約38万円
N. L.刊行費	112,600	カラー印刷
学会誌作成・郵送費	600,000	
学会誌図書費	55,000	書評用図書
優秀論文賞	50,000	
振込手数料	35,000	
消耗品費	35,000	文具等
HP契約	25,000	24ヶ月契約
役員会費	4,000	理事会、運営委員会、編集委員会
役員交通費	240,000	運営委員会、編集委員会
予備費	180,000	
合計	2,046,600	

次年度繰越金	5,285,457	
--------	-----------	--

合計	7,332,057	
----	-----------	--

会員の業績2012

(2012年12月までの業績：書誌情報は基本的にNDL-OPACによる。)

【単著】

木原貴子『挿絵を読む——ヴィクトリア朝女性挿絵画家の視線』、朝日出版社、2011年12月。

<目次>

- 第1部 ヴィクトリア朝の女性挿絵画家
- 第2部 メアリー・エレン・エドワーズの女性像
- 第3部 メアリー・エレン・エドワーズの少女像



入子文子『メランコリーの垂線——ホーソンとメルヴィル』、関西大学出版部、2012年3月。

<目次>

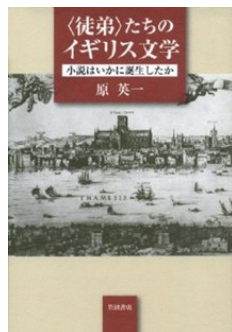
- プロローグ
- 牢獄より避難所へ——文学におけるホーソンの使命
- 第一部 ホーソンとバートン
 - 第1章 ホーソンとバートン——概観
 - 第2章 “Egotism; or, The Bosom Serpent” とメランコリー
 - 第3章 The American Notebooksにおける初期の記述とメランコリー
- 第二部 メルヴィルとホーソンとメランコリー
 - 第4章 “Blackness”の再考——‘Hawthorne and His Mosses’論
 - 第5章 メルヴィルとホーソン——一つの献辞をめぐって
- 第三部 “Burton’s Anatomy”の発見とその後
 - 第6章 ホーソンによるバートンへの直接的言及、“Burton’s Anatomy”をめぐって——『セプティミアス・フェルトン』覚え書き
 - 第7章 ビリーの吃音の象徴性——「船乗りビリー・バッド」覚え書き
 - 第8章 痣の象徴性——ホーソン・メルヴィル・痣
 - 第9章 “The Birthmark”とメランコリー
 - 第10章 『緋文字』——さまざまな再生と古典的(メランコリー)
 - 第11章 彷徨うヘスター——ルネッサンス精神史の新しい展開
- あとがき
- 補遺(翻訳)ロバート・バートン著『メランコリーの解剖』



原英一『徒弟たちのイギリス文学——小説はいかに誕生したか』、岩波書店、2012年10月。

<目次>

- 序章 文学史の新たな展望——演劇から小説へ
- 第一章 徒弟の登場——近代商業資本主義社会の幕開け
- 第二章 出世する徒弟、墮ちる市民——ロマンスとリアリズム
- 第三章 金と血と愛欲のゲーム——「文明」を呪詛する男と女
- 第四章 徒弟としての女——夫殺しの妻、忍従する妻
- 第五章 黒人奴隷の肉体——文明への叛逆と小説の誕生
- 第六章 美徳の不幸、悪徳の栄え——聖女のパラドックス
- 終章 徒弟の退場——小説はどこへ向かったか



舟川一彦『英文科の教養と無秩序——人文的知性の過去・現在・(未来?)』、英宝社、2012年5月。

<目次>

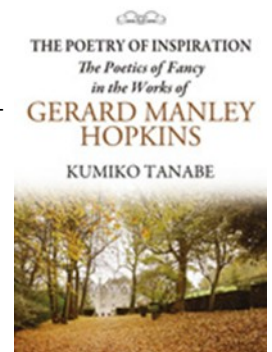
1. ディシプリンが生まれる時——英文学の場合
2. 英文科の『教養と無秩序』
3. ヨーロッパの遺産、国民の伝統——イギリス古典教育の英国的機能
4. マーク・パティンソン—不機嫌な大学人
5. 初めてのパティンソン研究書
6. 学生ジブシーの変容——アーノルドと近代科学のアイロニー
7. フライの『神話とメタファー』
8. 「キリスト教文学」の逆説
9. 文学部の「文学」——英文科に入学した諸君へ



田邊久美子、*The Poetry of Inspiration: The Poetics of Fancy in the Works of Gerard Manley Hopkins*, 2012年8月, BookWay.

<目次>

- Introduction
- Chapter 1: The Formation of Hopkins' Poetics of Fancy
- Chapter 2: “The language of Inspiration” and “Parnassian”: The Two Kinds of Poetics Diction
- Chapter 3: The Influence of Hopkins' Conversion to Catholicism on his Poetics of Fancy
- Conclusion



新野緑『〈私〉語りの文学——イギリス十九世紀小説と自己』、英宝社、2012年7月。

<目次>

- 第1章 笑う「自己」、笑われる「自己」——『エマ』における認識
- 第2章 自伝とその虚構化をめぐって——『マンスフィールド・パーク』とギヤスケルの『妻たちと娘たち』
- 第3章 空白の語るもの——『アグネス・グレイ』における自己形成
- 第4章 ニューゲイト・ノヴェルとライフ・ライティング—ブルワー＝リットン、エインズワース、サッカレイ、ディケンズ
- 第5章 記憶の形—ディケンズとクリスマス物語
- 第6章 移動する「自己」—ディケンズ『迷子になって』と「歩くこと」
- 第7章 反復の恐怖—ディケンズ「信号手」の深層
- 第8章 「知ること」の不幸—エリオット『引き上げられたヴェール』とディケンズの短編小説
- 第9章 「自己」の在り処—『フロス河畔の水車小屋』と『辛い時代』
- 第10章 ギッシングにおける「書く」自己、「読む」自己



松村昌家『ヴィクトリア朝文化の世代風景——ディケンズからの展望』、英宝社、2012年2月。

<目次>

- 第一部 フォアランナー・ディケンズ
- 1.『ドンビー父子』における商会(ハウス)と家庭(ファミリー)
- 2. メレディスの「父と子」
- 3. ディケンズとアンデルセン
- 4. 作家たちのパブリック・スクール
- 第二部 影響と共有
- 5.『トルコ物語』を訪ねて
- 6.『メアリ・パートナーマンチェスター生活の物語—』における「二つの国民」
- 7. マンチェスター美術名宝博覧会
- 8. 絵画と文学の交渉
- 第三部 変遷の様相
- 9. 描かれたユダヤ人像
- 10. ミスター・ヘンチャードとミスター・ドンビー
- 11. ディケンズと世紀末
- 12. ワイルドとディケンズ



解説編

- 「ジェイン・オースティンの生涯」(早瀬和栄)
- 「ジェイン・オースティンが生きていた頃の時代背景」(皆本智美)
- 「ジェイン・オースティンの手紙」(宮川和子)
- 「ジェイン・オースティンとブロンテ姉妹」(小田夕香理)
- 「ジェイン・オースティンとエリザベス・ギヤスケル」(大野龍浩)
- 「ジェイン・オースティンの技法」(谷田意司)
- 「ジェイン・オースティンは一八、一九世紀にどのように受け入れられたか」(中尾真理)
- 「ジェイン・オースティンは現代ではどのように受け入れられているか」(清水伊津代)
- 「ジェイン・オースティンの小説はどのように読めばいいか」(川口能久)
- 「ジェイン・オースティンを読む、「二インチの象牙」の人生を読む」(惣谷美智子)

川端康雄(編)小野二郎(著)『ウィリアム・モリス通信』、みすず書房、2012年2月。



松本三枝子『闘うヴィクトリア朝 女性作家たち——エリオット、マーティノー、オリファント』、彩流社、2012年9月。

<目次>

- 序章
- I. ジョージ・エリオット
- 第1章『フロス河の水車場』におけるマギー、語り手、ジョージ・エリオット
- 第2章 ポリフォニーとしての『ミドルマーチ』——諷刺家メアリ・ガースの役割と意味
- 第3章『ダニエル・デロンダ』の矛盾——ユダヤ人の紳士デロンダの限界
- II. ハリエット・マーティノー
- 第4章『経済学例解』における経済学と文学の融合——『ガーヴェロフのエラ』と『ガーヴェロフの喜びと悲しみ』
- 第5章 フェミニストの社会学者が書いた小説『ディアブルック』
- 第6章『時の人』におけるハイチの黒人指導者の栄枯盛衰
- 第7章 モック・ヒロイックで女を語る小説『マージョリバンクス嬢』
- 第8章 センセーション・プロットを支配する母親の物語『セイレム・チャペル』
- 第9章『フィービー嬢』における当世風娘と女性の神秘的な力



川端康雄、加藤明子(共著)『もっと知りたい バーン＝ジョーンズ——生涯と作品』、東京美術、2012年6月。

<目次>

- 序章 「夢の国」に住む若者——仲間との出会い1833-1859(0-26歳)
- 第1章 生活に美を——モリス商会の一人として1860-1869(27-36歳)
- 第2章 物語の森の中へ——隠遁の時代1870-1876(37-43歳)
- 第3章 賞賛と名声1877-1888(44-55歳)
- 第4章 アヴァロンへ1889-1898(56-65歳)
- 終章 象徴派のギャラリーで



【編著】

内田能嗣、惣谷美智子(共編著)『あらすじで読むジェイン・オースティンの小説——『ノーサンガー・アベイ』『分別と多感』『高慢と偏見』『エマ』『説得』その他——』、大阪教育図書、2012年7月

<目次>

- あらすじ編
- 『ノーサンガー・アベイ』(杉村寛子)
- 『分別と多感』(奥村真紀)
- 『高慢と偏見』(前田淑江)
- 『マンスフィールド・パーク』(渡千鶴子)
- 『エマ』(小野ゆき子)
- 『説得』(大角洋子)
- 『愛と友情』(山内理恵)
- 『レディ・スーザン』(宮副紀子)
- 『ワトソン家の人々』(橋本登代子)
- 『サンディントン』(馬淵恵里)



松岡光治(編著)『ディケンズ文学における暴力とその変奏——生誕二百年記念』、大阪教育図書、2012年10月。

<目次>

- まえがきに代えて——暴力と想像力
- 序章「抑圧された暴力の行方」(松岡光治)
- 第1章『ピクウィック・クラブ』——「ピクウィック氏のげんこつ」(中和彩子)
- 第2章『オリヴァー・トゥイスト』——「逃走と追跡——法と正義という名の暴力」(松岡光治)
- 第3章『ニコラス・ニクルビー』——「喜劇としての暴力——舞台と社会の間」(西垣佐理)
- 第4章『骨董屋』——「音の海を逃れて」



(猪熊恵子)

- 第5章『バーナビー・ラッジ』——「眠りを殺す」(渡部智也)
 第6章『マーティン・チャズルウィット』——「声なきものたちの逆襲」(畑田美緒)
 第7章『ドンビー父子』——「疾走する汽車と暴力」(松村豊子)
 第8章『デイヴィッド・コパフィールド』——「海の抑圧——ロビンソン・クルーソー挽歌」(川崎明子)
 第9章『荒涼館』——「国家・警察・刑事・暴力装置」(中村隆)
 第10章『ハード・タイムズ』——「教育の(暴)力」(玉井史絵)
 第11章『リトル・ドリット』——「内向する暴力——病的自傷者はなぜ生まれるのか」(武井暁子)
 第12章『二都物語』——「孤独な群衆の暴力性」(矢次綾)
 第13章『大いなる遺産』——「種子=ビップは牢を破って外で花を咲かせるか」(鶴飼信光)
 第14章『互いの友』——「腕力と知力——欲望と階級」(宮丸裕二)
 第15章『エドウィン・ドルードの謎』——「クロイスタラムに潜む闇の暴力」(加藤匠)

松村昌家(編著)『日本とヴィクトリア朝英国——交流のかたち』、大阪教育図書、2012年11月。

<目次>

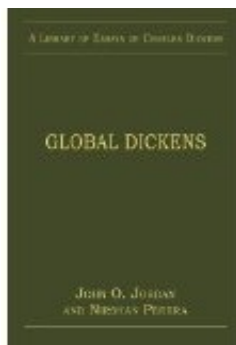
1. アームストロング砲——戊辰戦争への行程(松村昌家)
2. 英国ヴィクトリア朝の日本趣味と明治芸術のラファエル前派受容——中世主義と装飾芸術を結び目として(山口恵里子)
3. 帝国・病氣・医学——日英交流の一端(福田真人)
4. 文化の基層をもとめて——A・B・ミットフォード(中島俊郎)
5. イザベラ・バードと漱石——異国見聞の西東(大田垣裕子)



【共著】

Johan O. Jordan and Nirshan Perera (eds.), *Global Dickens*, Ashgate, 2012.

Masaie Matsumura(松村昌家) "Dickens in Japan"



富士川義之、結城英雄(編)『亡霊のイギリス文学——豊饒なる空間』、国文社、2011年8月。

松村伸一「韻文の中の幽霊——リチャード・ハリス・バーラム『インゴルズビー伝説集』のこと」

川崎明子「化学者が見る幽霊——ディケンズの『憑かれた男』」

河内恵子「女と男と子供と水と——スーザン・ヒルのゴースト・ワールド」



『英国小説研究』同人『英国小説研究』第24冊、英宝社、2012年8月。

大石和欣「パロディとしてのチャリティー——エマとモアと公共圏」

川崎明子「ジャネット・ウィンターソンの『灯台守の話』における間テクスト性——薬を飲まなかったトリスタンとインゾルデ」

坂本武「オースティン、ブロンテ姉妹、漱石をめぐって——クーパーを読むヒロインたち」

武田美保子「眼と耳から読むThe Return of the Native」



日本ペイター協会(編)『ペイター「ルネサンス」の美学:日本ペイター協会創立五十周年記念論文集』、論創社、2012年7月。

野末紀之「『ジョルジョーネ派』の批評言語」

十枝内康隆「ペイターはダ・ヴィンチになんを見たか——唯美主義的リアリズムから単性生殖願望まで」

加藤千晶「『ジョルジョーネ風の炎』の変奏——ペイターとD・G・ロセッティをめぐって」

蜂巣泉「『黄金の書』から『セント・ヴィクトワール山』へ——ペイター、ホイッスラー、フライ」

佐藤牧子「ウォルター・ペイターとヴァージニア・ウルフを結びつけるもの——

「人間を超越した神聖な存在との交わり」について」

玉井暁「文学言語の復権をめざして——ペイターの「事実についての印象」の詩学」



新見肇子、鈴木雅之(共編著)『揺るぎなき信念——イギリス・ロマン主義論集』、彩流社、2012年3月。

大石和欣「共感の疼き——女性詩人たちとそれぞれの奴隷貿易廃止運動」

鈴木美津子「シドニー・オーエンソンの『宣教師』におけるインド表象」



松本昇、東雄一郎、西原克政(共編)『亡霊のアメリカ文学——豊饒なる空間』、国文社、2012年8月。

岩瀬由佳「ヴィクトリアン・ゴーストの潜む場所——カリブ海地域の文学にみる「亡霊」の表象をめぐって」

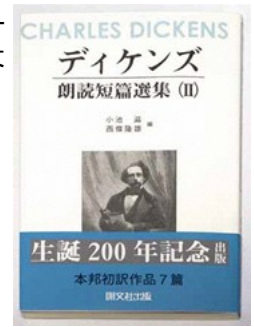


D・H・ロレンス協会(編)『ロレンスへの旅』、松柏社、2012年3月。

岩井学「第一次世界大戦という歴史/歴史という第一次世界大戦——キプリング、チェスタトン、ウェルズそしてロレンスによる歴史記述」



小池滋、西條隆雄(編訳)『ディケンズ朗読短編選集(二)』、開文社、2012年5月。



松島正一(編)『ヘルメスたちの饗宴——英語英米文学論集』、音羽書房鶴見書店、2012年3月。

宇貫亮「サッカーのクリスマス:やさしい人のもの悲しくも心やわらぐ楽しみ」

平賀三郎(編著)『ホームズの不思議な世界』、青弓社、2012年10月。

中尾真理「千駄々谷のシャーロック・ホームズ」



ピーター・ミルワード(著)、田邊久美子、小泉博一(共訳)『ファンタジーの七つの時代』、2012年4月、BookWay。



ピーター・ミルワード(著)、田邊久美子、小泉博一(共訳)『ファンタジー徒然草』、2012年10月、BookWay。



【翻訳】

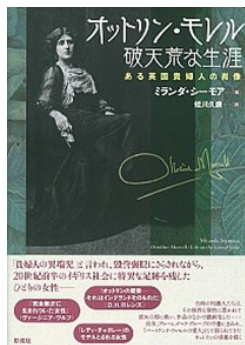
バーバラ・チェイス=リボウ(著)、井野瀬久美恵(監訳・解題)『ホッテントット・ヴィーナス——ある物語』、法政大学出版局、2012年5月。



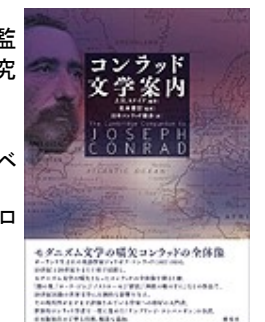
富田成子(訳)、海老根宏(監修)、内田能嗣(監修)『ジョージ・エリオット全集 6 急進主義者フィリクス・ホルト』、彩流社、2011年12月。



ミランダ・シーモア(著)、蛭川久康(訳)『オットリン・モレル 破天荒な生涯——ある英国貴婦人の肖像』、彩流社、2012年7月。



J・H・ステイプ(編著)、社本雅信監訳)『コンラッド文学案内』、研究社、2012年5月。



伊藤正範(訳)第6章『密偵』ジャック・バートウー
石清水由美子(訳)第8章 後期小説ロバート・ハンプソン

第13回大会のお知らせと研究発表の募集

募集中!

第13回大会は、2013年11月9日(土)に甲南大学岡本キャンパスで開催されます。

シンポジウムでは、「ヴィクトリア朝とヴォランティアリズム」をテーマとします。ヴィクトリア朝社会を構築する起動力としてのヴォランティアリズムに注目し、その歴史的ダイナミズムを検討します。

コーディネータ・司会は高田実(下関市立大学)氏が努め、光永雅明氏(神戸市外国語大学)、林田敏子氏(摂南大学)、大石和欣氏(東京大学)の3名にパネリストをお願いしております。詳細については、本誌13頁をご覧ください。

また今年は、特別講演に代わって、日本英文学会会長の佐々木徹氏(京都大学教授)と本学会会長の井野瀬久美恵氏に特別対談をお願いすることになっております。対談題目は「歴史研究と文学研究はどうつながるのか——伝記を手がかりに」(仮題)です。どうぞふるってご参加ください。

研究発表を希望する会員は、発表要旨(400字)に略歴(氏名、所属、住所、電話番号、メールアドレスを明記)と主要業績を添えてプリントアウトしたものを郵送でお送り下さるか、あるいはメールの場合は、添付ファイルで学会のメールアドレス(victoria@center.konan-u.ac.jp)までお送りください。メールの場合、受け取りの返信が届かない時は、お手数ですが再度送信してください。

締め切りは2013年7月13日(土)必着でお願いいたします。なお、学会の性質上、研究発表は「文化研究」に比重をおいたものとします。

甲南大学へのアクセスガイド

岡本キャンパス

● 文学部 ● 法学部 ● 経済学部 ● 経営学部 ● 理工学部 ● 知能情報学部

住所 〒658-8501
兵庫県神戸市東灘区岡本8-9-1

TEL 078-431-4341

JR神戸線摂津本山駅から徒歩12分
阪急神戸線岡本駅から徒歩10分

通学シュミレーション

三宮から約**18分** → 阪急三宮 → 阪急神戸線特急(8分) → 阪急岡本 → 徒歩(10分) → 岡本キャンパス

大阪から約**30分** → 阪急梅田 → 阪急神戸線特急(20分) → 阪急岡本 → 徒歩(10分) → 岡本キャンパス
JR大阪 → 東海道・山陽本線新快速(13分) → 芦屋 → 東海道・山陽本線(4分) → JR摂津本山 → 徒歩(12分) → 岡本キャンパス

京都から約**65分** → 阪急河原町 → 阪急京都線特急(39分) → 十三 → 阪急神戸線特急(16分) → 阪急岡本 → 徒歩(10分) → 岡本キャンパス
JR京都 → 東海道・山陽本線新快速(45分) → 芦屋 → 東海道・山陽本線(4分) → JR摂津本山 → 徒歩(12分) → 岡本キャンパス

姫路から約**62分** → JR姫路 → 東海道・山陽本線新快速(36分) → 神戸 → 東海道・山陽本線(14分) → JR摂津本山 → 徒歩(12分) → 岡本キャンパス

※乗り換え時間は含まれません

第13回大会

- 2013年11月9日(土) 9時30分～
- 甲南大学 岡本キャンパス

- シンポジウム
ヴィクトリア朝とヴォランティアリズム

- 特別対談
佐々木 徹×井野瀬久美恵

- 研究発表募集中!
7月13日(土)必着
応募先:
victoria@center.konan-u.ac.jp

編集後記 ニュースレター第12号をお届けします。今回は若い二人の方々に編集をお手伝いいただきました。次号から少し内容を刷新する予定です。文献案内はメールを活用します。

日本ヴィクトリア朝文化研究学会 事務局

〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8-9-1
甲南大学文学部 井野瀬久美恵研究室
Tel: 078-435-2344
E-mail: victoria@center.konan-u.ac.jp
<http://www.vssj.jp/>